

斎藤茂吉と若山牧水

山根 巴

要求・目標とが、一致する性質のものだったからである。

二

折しも「赤光」(天2・10)の後期であった。明治末から大正にかかるとの時期は、例えば杉浦明平氏の言われるように、「左千夫の晩年、赤彦は信州で小学校に教鞭をとり、茂吉、千樫、憲吉等の若い力が積極的⁽¹⁾に作歌活動に参加しはじめた時期、いわば「アララギ」の創生後間もない時期のことである。

「アララギ」だけでなく、日本の文学、思想がゆれ動きはじめていた。あるいはもっと広く世界の思潮が世紀末(十九世紀末葉)の不安から二十世紀の初葉の、長い平和のなかにきざしはじめた大戦争の予感に、大きく方向を変えようとしていたときだった。日本も、ようやく世界の思潮が、満十の時間差ほどのわずかな遅れで、押し寄せる時間になっていたのである。⁽²⁾

そういう外界にはむろんのこと、この時期の茂吉は、他の多くの歌びとがしたように、ごく身近な歌の世界や当時の歌壇の実際にも深く関心を寄せて、刺激を受けている。牧水歌への接近も、そのような彼の動向の一部としてとらえられる。

牧水歌へのはじめての言及は、「アララギ」明治四十三年六月号

斎藤茂吉の約五十年にわたる作歌生活において、その気持が若山牧水の歌にもっとも接近していた時期と言えば、第三歌集「別離」(明43・4)、第四歌集「路上」(同44・9)から、第五歌集「死か芸術か」(大元・9)にかけての頃となるのではないか。

「明治大正短歌史概観」(昭4・9)の「牧水」の項にも、彼は、この三歌集のなかから「春白昼^{まはる}」この港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり」「別離」、「海底に眼のなき魚の棲むといふ眼のなき魚の恋しかりけり」(「路上」)、「夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるものは死ねよとぞ啼く」(「死か芸術か」)などを抄出して、「牧水の歌は、同じ象徴的でもそこに常に感傷があり哀韻があり、小味なところがあつた。これスバル派の象徴派とちがふ点であり、青年のころを牽付けた点でもある。」と記している。若い茂吉もまた、初期牧水の、つねに感傷があり、小味なところがある清新な歌風にひかれていたことがうかがえよう。

そのようにひかれるに至つたのは、牧水のこの歌風と、歌を生む心・思いを重ね、その心持・主観の表出ということを言い、ほんとうに感じて作った歌でなければならぬとする当時の茂吉の作歌

の「短歌研究」でなされた。その研究は、「別離」から六百がとりあげられ、石原純・伊藤左千夫・古泉千樞・島木赤彦・民部里静と茂吉と、合評の形式ですすめられている。

合評では、後に「明治大正短歌史概観」にも掲げた「春白昼」の歌(前出)について、次のように述べるところがある。

此歌は少々僕の好きな歌である。それだけで充分であらうけれど、僕はなほ短歌観照者研究者の一人として以下少しばかり言はうといふのである。この歌平凡の様ではあるが何処かに刺激性の処のあるのは、作者が実際に望んで強烈に感受した主観の比較的率直なる詠出であるからであらう、従てこの作の価値は大部分こゝに存する。

港といへばすでに一種の心持があらう、が、その空気色彩事象の運動等、雅然たるにも係らず、流浪の一青年が埠頭の一处に立つて詠出したこの一首には作者の^〇見^〇方^〇が^〇よく^〇伺^〇は^〇れ^〇る^〇、一歩進んで作者当時の主観状態が一首を透して滲みて居ると感ずる。それがこの作の特徴である。委しい解釈はしないとして、この歌の内容はツマリ寂しい様なほかない様な淡しい様な一種哀感の淡い情調であらう。判然と一言では云へない程の一種の情調であるから、言語の表象的(観念的)特質を借りて、悲しいなら悲しいと直接に言ふ事が出来ない、ソコで作者はこの作の様に主観句(所謂)を交へないで(只第二句に注意を要す)客観的に表はしたのであらうが、僕はそれが自然であつて甚だ当を得たものだと思ふ。……

(圈点・傍点など原文のまま、以下同じ)

茂吉にとって、この歌は「少々好きな歌」に属するので、総論と云うべきことまでは、好むゆえん——「この作の価値」について、立ち入って説くことをした。続く後半の部分は、いわば各論のようなかたちで、句・語の逐一に注目しながら、例えば、「こゝの港」の「こゝ」といふのは稍説明的であり、何となく、くどい様で厭だ。『これの港』の方が幾分よい。『この港』がまだよい、或は港の字を除いて『此処』で沢山だ。……』といった具合に、批判を交えて詳しく評している。「この作者は腕に油が乗つて居るのをよい事にして一首をなるべく楽に作り得る様な調子で表はして居るのではあるまいか。」など、態度の基本に触れる点もあつて、受けて立つ作者の心の内がふと思われたりもするのだが。

やはりこの歌の場合は、比重を、前半の総論の部分におかなければなるまい。つまり、欠点はそれとしながらも、一首が彼のやや好きな歌であり、「作者当時の主観状態が一首を透して滲みて居ると感ずる。それがこの作の特徴である。」として、一首の内容(心の状態)とそれの表わしかたとを作者の側に立てて説き、その表わしかたが「自然であつて甚だ当を得たものだと思ふ。」と言いきつていことが、彼にとって重要な意味を持っているのである。これについては、柴生田稔氏が、「そのみづから求めてゐる心的状態の表出を、この牧水の実作に正しく見出してゐる」と指摘されている。後に詳しく述べるが、自分で選出した歌でないだけに、この時点でこの歌に出会えたのは、彼として少なからぬ喜びだったろう。合評参加の意義をあらためて思うのである。

と同時に、もしこの牧水歌評が合評というかたちでなく、彼の単

独の場ではなされていれば、あるいは、この後の牧水との交渉が、もつと別の展開を見せたかもしれぬと思つてみる。

「近頃歌集を出した、若山牧水氏の作歌を研究的に批評して見やうといふので、……」と、左千夫が前書に合評の動機を記している。

顔ぶれは彼のほかに五人（前出）、ここには、「必ずしも単に評判の歌集を取上げるといふのではなく、牧水の新歌風に共感を持つ若い同人等の意図が働いてゐると見ていいと思ふ」けれど、「現はれたところでは、……左千夫の統率下に一体となつて外に對してゐるといふ印象を免れない」ものとなつてゐる。ありていに言うならば、左千夫が六首を選び、前書を書いて、茂吉ら五人が交互に発言したあと、まとめの批評言もまた、彼が一首ごとにつけてゐるのである。「今回は殊に他の欠点を打つといふ精神を根柢から除去つての研究である……」と、その前書にある。しかし、全体として、「作者の心持に共感するところよりも、その表現の欠陥を指摘非難するところの方が目に立つ類のもので、……若い同人等は互に競つて、きびしく一々の歌にいどみかかつてゐる感じ」をどうも覆うことができない。茂吉にしても、さきの「春白昼」の歌のほかに、「月の夜や君つ、まじう寝てさめず戸の面の木立風真白なり」を評してはじめて「この作の内容は決して無意義では無い。」と言いながら、「処が、……」「次に……」と、たてつづけに欠点をあげてゆき、

最後は一首の調子について、「僕はこの場合もつと波状運動を画く様にあり度いその方が真の表現であると信ずる。作者にして熱心ならば、今一度内省して見るのも無駄では無からう。……」と結んでゐる。

単独であらうとなかろうと、対作品の姿勢に変わりはないはずである。ただ、気持の上では、複数だと相互に競い合い刺激し合うといふようなこともあつて、単独のときとかならずしも状態が同じとは言えないと思う。牧水歌へのはじめての発言であるだけに、この「別離」評を、茂吉単独でさせたかつたと思うのである。

三

「アララギ」が「別離」合評を行なつた翌月（明43・7）、「文章世界」の雑誌月評欄は、この合評に触れて、「細かくそれを解剖しての研究のみに走つて、却つて一首全体から来る情趣を閑却してはゐなからうかと思はれる点がある。」と評した。これを受けて「アララギ」は、あくろ八月号に、閑却してはいないつもりで、批評全体を読んでくれればわかると、千樫の名で応酬してゐる。

月評はしかし、「第三者の観察としてうなづけるもので」、牧水が、「創作」八月号に掲げた評論「樅の木蔭より」で反撥したのも、「当事者として無理もないところがあると言へよう。」左千夫に対し、その「批評は皮膚も感情も干乾びはてた場末町の荒物屋の主人でも云ひ相なこと……」という憎まれ口をきいたのもその結果だが、「それがまた当の左千夫のみならず、アララギの若い同人等の感情を刺激した」であらうことは想像に難くない。知られてゐるように、左千夫は、「アララギの評論に対する創作の批評に就て」と題する文章を「アララギ」十月号に書き、「場末町の荒物屋の主人が云々とはい尖に左千夫に對する巧妙なる人身攻撃である……」とした。この「人身攻撃云々」について、牧水は後に、「飛んでもない間違ひで

ある」と述べ、さらに、「その外誤解から誤解を生んだことが多かつた……」としている。

「誤解から誤解を生んだ云々」は、牧水のみならず、アララギ同人たちの言い分にもなるであろう。つまり問題は、相互に誤解を招くような言いかたをしまして——相手の気持（真意）が汲めなかつたところにあると言えよう。立脚点の異なることは、はじめからわかつていたはずであるが、合評後わずか四か月の間に両者の感情がここまでもつれると、だれが予想したろうか。

予想もしない事態となつてからのことをふりかえて、「創作」明治四十四年三月号の「二月の歌」の欄で、牧水は、「いつぞや此の雑誌（筆者注、「アララギ」が「別離」の歌に対して批評を下した時、諸氏がどういふ態度で歌を咏まるゝかを一寸のぞき見て以来、どうもその態度に我等は賛成が出来難い。諸氏の作を諸氏の作として見る時は誠に面白い。が、それが我等に交渉が無い（少くとも薄い）といふことは悲しい事実ではないか。」と述べている。「アララギ」に対して、決して単純な心境でなかつたことがうかがえるのである。

「別離」合評以後、アララギ同人たちは、明治四十四年三月号の「短歌研究」（諸家の歌をとりあげているうち、牧水のは「路上」の二首である）と、大正二年一月号の「死か芸術か」漫評（とりあげているのは十首）とで、牧水歌を合評している。メンバーはその間に中村憲吉と藤真とが加わつて、延べ八人となった。後に詳しく述べるが、堀内卓が「路上」の一首を推称していたのも、「別離」合評の前後であつたらう。牧水のように「悲しい事実云々」とは言

わないけれど、それぞれの胸の内には、牧水（とくに「二月の歌」の欄で、その心情の一端を語つたこと）に対する、いかばかりかの思いがあつたかもしれない。

ともかく、「アララギ」のみんなが、牧水に関心を強く抱いた時期があつたのだ。茂吉もそのなかの一人なのである。そして、それへの言及は、合評のほかは歌壇月評的なものが少なくない。以下、大正元年前半期までのそれらの主なものに、まず目を向けてみよう。

(1) 牧水君の「落葉の松の中なる我家」はあれは説明とおもふ（單純に）読者に光景の輪廓だけを見せようとする一種の手段に過ぎないと思ふ、独語か心持の様な色調が出て居ればよいが、僕はいくら考へてもそれが無い、ソコで「いざ君よ寝む」はだめであるとおもふ、牧水君のと僕のと同じだらうか、その辺は読者にまかせろ……

（明43・9・14付、千樫宛書簡）

(2) 堀内卓は、……広がりわたる夕べの色のの中にほんのりと白い砂利の心持がよいと話した。其時堀内は若山牧水の

木・葉・み・な・風・に・そ・よ・ぎ・て・う・ら・が・へ・る・あ・を・山・に・人・の・行・け・る・さ・び・し・さ・

といふのがよいと言つて居た。組織立つて言はないが堀内の心持が分るであらう。

（「アララギ」同44・1「童馬書簡」）

(1)は、この年七月号の「アララギ」に載つた彼の歌五首の表現と内容について述べることを主とした、手紙の一部である。その第一首「暮はらのとほき森よりほろほろとのぼるけむりに行かむとおも

ふ」と、牧水の「風風ぎぬ松と落葉の木の叢のなかなるわが家いざ君よ寝む」とを比較し、牧水の場合が「読者に光景の輪廓だけを見せようとする一種の手段に過ぎない」と、ここで難じている。「風風ぎぬ」の歌は、さきの合評でとりあげられたものだが、茂吉は批評をしていないのである（評者は純・赤彦と左千夫）。

(2)は、卓を追悼した文章のなかに見えている（明43・10・17没）。この「童馬言」の記述にも触れて土屋文明が次のように述べたのは、その後五十年を経過してからである。

堀内卓が若山牧水の「木の葉みな風にそよぎてうらがへるあを山に人の行けるさびしさ」といふのを推稱したことがあり、それが話題になつたことがあつた。……多分堀内の意はこの牧水の歌のやうな新鮮さが、アララギには欠けてをるといふことであつたらうと思ふ。この歌に牧水の影響があるといふのではないが、そんなことも一つの動機となつて、茂吉を中心に新しい方面を開拓しようと努力したといふことは考へられる。さうして、この一首に見られるやうな、非常にたしかな自然のとらへ方と、同時に深い、うごいてをる感動が表現し得られたといふことも考へられる。……（「アララギ」昭33・5「斎藤茂吉短歌合評(二)」の「墓はらの」の歌の条）

早くから作歌を志して左千夫の指導を受け、西洋文学の素養もあつた卓の、持前の澄明な感覚と、そこに培われた新鮮な歌風とが、アララギ同人たちに与えた刺激・影響のほどは少なくなかつた。牧水歌評にして同様である。茂吉によると、その言いは「組織立つて」いなかつたようだが、心持のほどはじゅうぶん汲めたのだ。

それが「分るであらう。」としか言っていないのを、文明が受けて、「堀内の意は……」と説き明かしているのに注目したい。

(1)の、千樞宛の手紙に茂吉が引いた牧水歌とはむろん違つてはけれど、この手紙のことなども思ひうかべて、文明の合評の文章は記されたであらう。「こんなことも一つの動機となつて」とあるのが首肯される。そして、あらためて(1)(2)を読み返してみても、決してささやかな動機ではないと思つのである。

(3) 若山牧水氏……本誌所載の三首は甚だつまらぬものである。氏の歌は段々円熟して来て、夕暮氏の歌の様に態とらしい処が無いのは、読んで感じがよいがその代りに生氣が無い様に思はれる。おほいなる青の木の葉ひと葉もち林出づればわが身さびしもかういふ自分の特殊な情調にゐて詠歌するのならば、その特殊情調の響が読者の胸に共鳴する如く一首全体がなくてはならぬ。それにはその情調を深くしみじみと自ら感ぜねばならぬ。その態に居て筆を落したならばこの歌の様に力のない歌が出来やう筈が無いと思ふ。その心に深く住せずして作るからこの歌の様に単に輪廓だけのものとなつて一首の奥から心持が染み出て来ないのである。

(「同」明44・10「九月の歌壇」)

(4) 私は好んで世間の歌を詠むけれども、一向感心せぬのが多い。牧水啄木夕暮其他二三氏のに時たま面白いのが見当る事があるのみである。従而歌を論ずれば悪口になり勝である。従而人に厭がられ冷笑される位が関の山である。……私は毎月のアララギの歌は皆よいとは思はない。佳い歌は一年に幾つしか無いのである。

自分の作でも同様である。……

〔同〕同45・1「雑録」傍線筆者、以下同じ

(5) ① 浪林橋及雪(若山牧水) 氏のこの歌は心が緊張して奥底から湧く言語が容易に出ないといった工合の歌である。從而歌に心の休止が多い。かういふのもよい……「雪来る、われのいのちの眠ぢし眼のかすかに開き、痛み、雪降る。」等其他よい歌がある……

② 山へ急ぐ旅人の歌(若山牧水) 堪へ難くなつた、張りつまつた心のひらめきの歌である。読者をはつと思はせる程の力を持つてゐる……

さびしさを恋ひ恋ひて身は眼無鳥ものな問ひそね山へ急がむ

おなじくは行くべきかたもさはならむ何とて山へいそぐ心ぞ

……△掲載歌三首省略▽

〔同〕同45・4「三月歌壇」

(6) 所謂象徴的な短歌を作り出したのは隅外先生の影響を受けたスバルの歌人が最初のものであつたらうと思ふしかし余り感服が出来ぬ。短歌の形式と緊密に溶けて居なかつた為めである。短歌が如何なる技巧を用ゐようともその根本の調子は矢張り詠歌の匂ひであるとは予の感じである。前田夕暮氏主宰の「詩歌」紙上で新しい試みをした新進の歌人が居る。牧水氏の「路上」巻頭の歌などは比較的よく短歌本来の形式と結び付いたものだと感じて居る。アララギ近來の作物中には心持を象徴的にそして稍鮮かな感覚的に表はした歌がポツ／＼見える様である。従來の伝習的な何でも彼でも同じ様な粗雑な感じ方を離れて兎も角も固有のひびきを有する感じに進みかけて居る様である。……

〔同〕同45・6「童馬漫筆(三)」

(3)の「本誌」は「早稲田文学」で、ここには「甚だつまらぬ」という全三首の、第一首を評した部分を引用した。つまらないのは「生氣が無い」からである。ここに諷々と説いている、力のない歌のできたゆえんが、続けて簡単に評した第二首にも、とくにとりあげなかつた第三首にも適用されるのは言うまでもあるまい。「氏の歌は段々円熟して来て」とあるので、注意の継続していることが知られる。同じ尾上柴舟門より出た前田夕暮の歌風との比較を行なっているのも、見のがし得ない点である。

(4)では、自他いずれにもきびしい茂吉を見る。「時たま、面白いのが見当る事があるのみ」では、名を掲げられても手放しで喜べそうにないが、それでも、よい歌を作り得る歌人として、牧水を筆頭に、石川啄木と夕暮の名を明示しているのは、じゅうぶん注意したいところである。

(5)の①「浪林橋及雪」は「詩歌」に、②「山へ急ぐ旅人の歌」は「新潮」に、それぞれ出ているものである。「三月歌壇」とあるが、①は二月号収載である。同号には、夕暮の「樹木と旅人」も載つた。茂吉は、この月評でそれととりあげ、そこでも牧水のことに触れている。その具合をさきに見てみよう。

「氏(筆者注、夕暮)の生活とは離れた作であると或評者が云つた様に記憶して居るが、旅行も勿論生活の一部である。余は従來の所謂生活歌の一部よりは余程の方が優れて居ると思つた。天然の歌でも生活の歌でも恋歌でも真に内から湧いたものならば皆尊いと思ふ。若山牧水氏の「路上」中の佳作は旅中の歌が大部分を占めて

ると思つた。……」と。続けて牧水歌、「外海の透徹りたる一色の
みどりにほひ燈台の立つ」など五首をあげている。夕暮も牧水も
同時に認めているおもむきである。

④の「浪林橋及雪」は、「行くにあらず、帰るにあらぬ旅人の類
に港の浪蒼く見ゆ」以下、茂吉が引いている「雪来る」の歌まで二
十二首が並ぶ。「見よ、あれ、うれしげに手に持つこと、今朝の林橋
のなどてや斯からむ」「林橋の、真白き肉にいとちさきナイフをあ
てぬ、沈思の後に」(12・13首)などは林橋を詠んだものの一部だ
が、これに限らず全体に、読点をつけたものが多く目につく。茂吉
はこの読点を「心の休止」と見て、「心を緊張して奥底から
湧く言語が容易に出ないといつた工合の歌」としている。作歌の呼
吸の機微に迫った把握と言えるように思う。

⑤の「山へ急ぐ旅人の歌」には、「信濃の国に赴かんとて」と副
題があつて、全十一首。言うように、「堪へ難くなつた、張りつま
つた心のひらめきの歌で」茂吉も心を凝らして読み試みしたことが、
「読者をはつと思はせる程の力を持つてゐる」とするところに察し
られるのだ。

⑥⑦とも、(4)で「時たま面白いのが見当る」と言つていた、その
具体例と見ることがができる。わずか三か月の間に焦点がいちじるし
く明確になつてきたようだが、これについては、(3)のところで述べ
た、かねてからの注意の継続ということに思いを致さねばなるまい。

(6)に移ろう。後略の部分を大まかに言うと、一部の人はこの現象
を、根岸歌壇の墮落だと心配してくれた、そうかもしれないが、死地
に陥つて動きがとれなくなればお互いに滅亡するまでで、そのとき

は、自分らのようなものの滅亡にも「ほのかな哀れの美」があろ
うとし、そのあとに、アララギ同人たちの近作九首を、作者名なしで
掲げている。「心持を象徴的にそして稍鮮かな感覺的に表はした歌」
の実例のつもりであらう。

それに先き立ち、ここでは、スバルの歌風に感服できないことを
述べ、「詩歌」と「路上」の作——夕暮と牧水とを大きくとりあげ
て推称している。柴生田氏も言われるように、「その判定の標準は、
茂吉がそのころ努力して悟入するところのあつた短歌本来の形式と
いふもの……に置かれて居る点が注意すべきであつて、つまりここ
に至つて茂吉は、そのみづから歩んで来た道(根岸派万葉調)の上
に自覚した原理に基づいて、新時代と歌風の意義を自主的に把握す
ることができた」と思うのである。ちなみに、「比較的よく短歌本
来の形式と結び付いたもの」と言う「路上」の巻頭は、「明治大正
短歌史概観」にも掲げた「海底に」の一首(前出)である。

以上、(1)から(6)に至る一年九か月の間、茂吉は、眼を誌上に発表
される牧水の歌に、注意深く注ぎ続けている。ついて、要点は、こ
く自然、また必然のことながら、一つに、対処の姿勢が終始主体的
であること、二つに、(3)の時点から夕暮と並べてとりあげているこ
と、に帰するようである。

四

大正元年九月、夕暮の「陰影」と牧水の「死か芸術か」が、相つ
いで公刊され。「アララギ」では両者とも、赤彦・憲吉・千樫・茂
吉による合評を試み、「『陰影』合評」を十一月号に、「『死か芸術

か「漫評」を翌年一月号に載せている。茂吉に限ってみると、これらの合評のほかに、単独でも、「陰影」と題して紹介文を十月号に〔無署名〕、「死か芸術か」雑感」を一月号に書いている。

(7) 夕暮氏は牧水氏と共に尾上柴舟の門から出て居る。而して近來の運動は明星一派の空想派技巧派に反対して立つた姿であつた。而して所謂生活歌といふ事を唱道した。その後幾分歌風も変化して来て居る。氏は牧水氏のようにしんみりとした歌は余り作らないし、無器用であつて、時には砂の様な歌を連発するが、一種鋭い、而して深みのある底光りする歌を詠む、予は昔ては随分思ひ切つて氏の作を罵倒した事もあるが、一冊の歌集を通読すると優れた作がなかなか多く、前の批評に対して甚だ忸怩たるの感があるのは事実である。

〔「アララギ」大元・10「陰影」

(8) 氏(筆者注、夕暮)の歌を貫く線は一般に太い。一般の感じはパツと明るく無く何となく暗い。同じ神経の歌でも感覺的な歌でも絹糸の様な神経では無い。所謂純抒情歌の場合でも、柔かな息吹の歌では無い。何となく重々しい、さうして乾いて居る。灰色の空、黒光りの海、真夏の黒ずんだ深林、赤茄子の腐れといった様な心持の歌が多い。さうして感じ方に応じて技巧が繊細でないから定家の歌を見た眼には驚くに相違ない。しかし一卷の歌集にあつてはその間に幾通りかの多様な色合のあるのは無論である。さうして氏は現歌壇の晶子白秋牧水勇諸氏以外に独歩の境地を占めて居る所以は何かの特色がなければならぬ。是等の特殊性も其一因子であらうと思ふ。

〔「同」同・11「陰影」合評〕

(9) 昔から歌人などは一寸素人ばなれのした、而して特に涙もろい点だけで素人と違つた感じ方をして来て居る。或は又何か意味ありげな素振りをするだけで素人と違つて居た。然も詩人の感じ方は単にそれだけではつまらぬと思ふ。失礼ではあるが牧水氏の歌を例にすると「冬の陽のあたる片頬にひそやかにさしそへて見ぬこの紅き実を」でこの「ひそやかに」は即ち意味ありげなやり方であるがかういふ事は現在の僕には甚だつまらなく感ぜられる。僕は人間の衣裳を着て品を作つて、外面だけを見せようとする振舞に一種の興味と一種の悲哀も感ぜられるが、癡呆に陥つた狂人の赤裸々な行動にも、生者として最も力強い或物の潜んで居る事を感じて居る。僕の歌に「變動が来り僕の歌に湿润の気の失せたのは、僕にとつては、歡喜の一つである。三年前に於ては僕は矢張り「冬の陽」の歌に感服したかも知れぬ。けれども少くも今は感服しない。

〔「同」同2・1「死か芸術か」雑感〕

(10) 「死か芸術か」一巻には作者の言の如く、痛ましき心の動揺と悔恨のひびきの流れて居るのは僕も同感であるが、それで居て何処かに甘たるい浮いた所のある様に思はれるのは表はし方が朗々と過ぎてゐるからである。さばれ、短歌の形式を尊重し愛惜し、飽くまでこれに抱きうとするのは、僕等は非常に心強く感ずるのである。

(同)

茂吉の書いたもろもろの文章のなかの要所を、(7) (10)に抜粋して

みた。気づくことの第一は、述べかたが具体的に、しかも気取らず率直・正直であること、第二は、夕暮の比重が、牧水のそれよりはるかに大きくなっていることである。

ここで、彼の、夕暮歌への評価のあらましをかえりみよう。明治四十四年十月の時点で、牧水歌とくらべて「態とらしい処がある」としているし(前節③)、別のところでは、「真実の声が少ない。まことの詠歌の発露がない。」⁽³⁾ともしている。その半年前の三月には、

「わが敵か味方かわかぬ人多きその中にゐても思ひする」をとりあげて、「この歌の如く、冗漫にして乾燥し切つた歌調にて、どうして作者当時の心持があらはるゝであらうか。一般にこの作者は事柄を解剖し若しくは発見した時に態と複雑なる表現法を以て、どうかかにか卅一字を組み合せて、而て世相に触れたと得意がつて居る様に思はれる。其は確かによろしく無い。又無利用なる表現法といふ事を唱導して、冗漫にして乾燥した歌調を誇りとして居る。それもよろしく無い。」と、まことに手きびしく批評している。「探れる」歌、ということを言うようになるのが、十一月号の月評である。それから二か月を経た四十五年一月号に、「時たま面白いのが見当る」歌人とし(同④)、四月号で「樹木と旅人」の作を賞讃するに至った(同⑤)の④について述べた箇所)。

(7)(8)は、その後半年を経過している。「しんみりとした歌」を作る牧水との違い——夕暮歌の特質について、「陰影」一巻の説みをふまえて詳細に説き、かつて自分の行なつた夕暮歌評に「甚だ忸怩たる感があるのは事実」と、その心の内を披瀝しているのだ。前年の三月・十月あたりで述べたことを思いおこしているであろう。

が、一年前後でのこの変りようは驚くばかりである。この年四月十三日に啄木が没したので、(8)の末尾にその名が見えていないけれど、あらたに与謝野晶子・北原白秋・吉井勇があがっている。その頃茂吉のもっとも関心していたのが、彼らと、牧水・夕暮であったことが知られるのである。

牧水と夕暮とに対する評価は、しかし、この期に及んで、前者から後者へずつと傾斜して来た。(9)に、三年前なら感服したかもしれぬ、としてあげている「冬の陽の」の歌は、前年四月の時点で推称していたものである。(前節⑤)の④。「浪林橋及雪」一連中の一首。だが、「少くも今⁽¹⁶⁾は感服しない。」と言う。短歌の形式にどこまでも拠ろうとすること自体は、限りなく心強いだけでも、「品を作つて、外面だけを見せようとする振舞」が、「甚だつまらなく感ぜられる」からである。「表はし方が朗々とし過ぎてゐる」で、「遊戯的分子」が目立つからである。このような牧水の歌にくらべて、夕暮の歌に認められる「本気で正直な処」は貴重だった。「無器用であつて、時には砂の様な歌を連発するが、一種鋭い、而して深みのある、底光りする歌を詠む」姿勢が、新鮮で好ましいものに感じられたのである。それはどうしてであらうか。

結論をさきに言うならば、茂吉のなかで、一つの変化が生じたからにはかならない。

○ 一種の心持を言語で表はす場合、特に或る事象に触れて一種の心持の揺いだ場合には、その事象と関聯して感⁽¹⁷⁾覚的に表はす事がある、……茲でいふ感⁽¹⁷⁾覚的表現といふのは感官に直接である表はし方といふ意味である。いまだ感⁽¹⁷⁾覚の道程にある心的状態、それ

を鮮やかに表はす仕方と云ふ意味である。……

○ 短歌にはこの様な場合が甚だ多い。短歌は抒情詩だといつて夢の様なネチ／＼した歌ばかりしか歌で無いと思ふともがらは憐れむべきである。予は近ごろ古歌を讀みふけて愈々この感を深くした。短歌では単に夢の様に「嬉し」「悲し」ではつまらぬ場合も多い事を知らねばならぬ。

○ 以上の言は表現法の一部分に就ての論である。從而短歌の表現法の凡くが是非感覺的でなければならぬといふのでは無い。要は心持に直接であれといふ事を斯くの如き表現法も大切である、例を以て説明したのである。

「陰影」と題して紹介文を書いた、「アララギ」大正元年十月号収載の「短歌雜論(十)」に、以上のような記述がある。上に「一つの変化」と言ったのは、この頃、このような考えを持つようになっていたことである。記述に即して要点をおさえると、「心持を表はす」ことが根本になつていゝるのにかわりはないけれど、「心持に直接であれ」といふ点がとくに強調されて、そうあるべく、「いまだ感覺の道程にある心的状態を鮮やかに表はす仕方」という意味において、「感覺的表現」——「感官に直接である表はし方」といふものが考えられているのである。

「もともと茂吉には、出発点の「脱衣の婆々が口赤きかも」「赤蓮赤き光を放ち居る処」のころから、その表現に具象的で感覺的な特色が目立つところがあつた。だがその特色が、根岸派の形式的、輪郭的な作風と結びついて、自由な感情表出の道が中々つかなくなつた時、しみじみとした心持を表はすといふことが、茂吉にとつて第

一の課題になつたのであつた。それが単に自己のムード、感じた心持から、さらに心持への「直接」といふことが目ざされる段階に至つて、改めてこの「感覺」に対する関心が起つて来たわけである。第一課題の克服に主力を注ぐ茂吉にとつて、牧水歌の示唆するものは少なかつた。しかし、その時期を過ぎて、みずから、「短歌では単に夢の様に「嬉し」「悲し」ではつまらぬ場合も多い事を知」るようになる、もはやそこに多くを期待する意味も必要もなくなつたと言えよう。

(9)10にその一部を掲げた「『死か芸術か』雜感」(大2・1)に、次のような一節がある。

氏(筆者注、牧水)と夕暮氏と二人並べて世間では云々する。其当時は牧水氏の方が夕暮に比して一段優れて居ると思つて居た。而して夕暮氏の歌が云々されるのが不思議だと思ふ程であつた。つまり牧水氏の歌を夕暮氏の歌よりも早く理解し得たのである。其後先輩にお話を聞いたり西洋の新らしい画家の繪の寫真版を見せて貰つたり、いろいろして居て、「陰影」を讀んだ時、矢張り優れた歌が多いと思つたのである。理解のし方が遅かつたのである。

茂吉が、牧水の歌を夕暮の歌よりも早く理解し得たのは、動かぬ事實である。そして、前者が後者よりも一段すぐれていると思つていたのは、しみじみとした心持を表はすことをモットーとしていた頃である。「そのころ不器用で乾燥してゐると言つて非難した夕暮の歌を、今、「西洋の新らしい画家の繪」から得たところのものによつて理解することが出来たといふのは、つまりそこに、情緒や気

分の鬨を突き抜けた「感官に直接である表現」の力を見出したことになるであらう。すなはちこの西洋造型美術への接触が、……古歌の世界への沈潜と並んで、茂吉の新しい開眼における第二の要因をなしてゐることを知るので、その影響の直接で強烈であつた点では、この第二因の方を挙げねばならない⁽¹⁸⁾と思う。「古歌」は、「近ごろ読みふけて」と言つてゐる。「金槐集私鈔」が「アララギ」明治四十四年六月号にはじまつてゐるのを思いあわせると、万葉集や金槐集の歌をさすものと思われる。

こうして、茂吉の歩みは、牧水的な温潤の世界から夕暮的な乾燥の世界（四十四年三月には「乾燥した歌調」ということを繰り返して、その作を難じていた）へと向かうことになる。突破口と言へば大げさだが、第一の課題に続く第二の課題をみずから見出し得たという意味で、彼にとつてこのことは喜びだった。「僕の歌に一變動が来り僕の歌に温潤の気の失せたのは、僕にとつては、欲喜の一つである。」と、きつぱり言い切つてゐるではないか。

しかし、ここで、この、「夕暮に対する評価の転換は、単に夕暮の知遇に相応するといつた意味のものではなく、当時の茂吉の作歌動向と密接に関係する、茂吉に取つて本質的な意味を持つものである⁽²⁰⁾」ことが、正しく認識されなければならない。「夕暮の知遇」とは、明治四十五年のはじめ頃から茂吉の歌に注目し、雑誌の月評などで推称しはじめてゐることをさす。この年の「アララギ」八月号の「童馬漫筆」のなかで、「おれが前田夕暮さんから賞められて嬉しくて有り難いと思つた事を君は知つてゐるか。」と、茂吉も言つてゐる。「その前年あたり夕暮をあのやうに批評してゐた茂吉に対

して、夕暮がこのやうな態度に出たことは、道理として文芸にたづさはる者の当然ではあつても、しかも実際の人間感情の世界において、異数の美事であつたと言へよう。茂吉が「嬉しくて有り難い」と思つたのは、さもあるべきことであつた。かうした両者の関係の成立は、牧水と茂吉との場合に比べて非常な相違⁽²¹⁾なのである。

五

昭和二十四年一月、雑誌「余情」第九集が『若山牧水研究』を特集した。茂吉はその巻頭（長谷川銀作編「牧水百首」に続く）に、「別離」と題して、約二、八〇〇字の文章を書いてゐる。当歌集については、刊行の二か月後、左千夫以下五人の同人たちと、「アララギ」誌上で合評を行なつたことがある（二・三節参照）。

牧水没後二十年を経過したいま（昭3・9・17没）、茂吉は、文章を書くとしてこの歌集を借りて読んだ。結果は、「やはり一つの創業者としての意気、一つのエポックを作つた人としての進展の跡を感じる事が出来て、なかなか有益であつた。」と言つた。「海の声」から「黒松」に至る十五の歌集のうち、「別離」は、茂吉にとつてもっとも敬し愛すべきものだったのでないか。「牧水氏生涯の名歌といふものは、別離を通過した歌だといふことを顧慮すれば、牧水氏の歌の発育史の上から別離を尊敬せねばならない。然かも別離の歌は、初から終まで、一首一首皆骨折つて作つて居り、一首と雖なげやりに出来たものが無いやうである。」と、この文章を結ぶにあつて述べてゐるのである。

「明治大正短歌史概観」の「牧水」の項は上に掲げた（一節参照）。

続く「夕暮」の項を見ると、「牧水の歌風と違ひ、無技巧素朴のうちには、西洋近代静物画に見る如き動きと新鮮さがあった。それであるから、同時代の青年でも、牧水に趣かぬものは夕暮に趣つた。

この二人の歌風は相雁行して当時の青年に喜ばれ、歌壇に一期を画したと謂つていい⁽²³⁾と記している。その「一期」が「牧水・夕暮時代」と称されることは、周知のところである。

言うように、「同時代の青年でも、牧水に趣かぬものは夕暮に趣つた」これが通常であつたが、茂吉の場合は一人で両者に趣いている。しかも、彼自身の作歌の動向・要求・目標と切り離し得ぬ関わりを持つた上で、である。どこまでも主体的になされた、牧水への接近・理解であり、また、夕暮への接近・理解であつた。そこから吸いあげたものを大切にしながら、彼は、アララギの茂吉へと成長していくのである。

若き日、「別離」合評に真摯に取り組んだこと、それだけに、この合評の反響は大きく、アララギと牧水との間にまもなく感情のわかかりが生じてしまったこと等々、「余情」の文章を書く茂吉の心には次々に思ひおこされて、没後二十年を経ているとはいへ、やはりある種の感慨が湧いたろうと想像される。ことに、「心から傾聴したかつた」歌集「赤光」の批評を、すでに書いたと報じられながら、自分の書いて送つた「さすらひ」を讀みて」を早く読んだばかりに、「前に私の書いた「赤光」評を發表するのがバカ臭くなつたから」と言われて、聴けずじまいになつたのは、茂吉における生涯の痛恨事の一つではなかつたらうか。「赤光」に就いて「創作」大3・1)に、「赤光に就いて」を讀んで若山牧水に答ふ」

(「アララギ」同・2)で応酬してから、はや三十有余年の歳月を闊しているけれど、牧水を思い描いて至りつくところと言へば、おそらくそこだつたのではないかと思うのである。

茂吉に即してみると、夕暮との間に成立したような関係(前節参照)を、牧水との間にも成立させることができれば、思い残すことはなかつたらう。所詮それは無理であり、できない相談であつた。茂吉にとつてだけでなく、牧水にとつても、ひいては斯界にとつても不幸であつたと言うはかない。

ただ、後年の茂吉が、牧水的な抒情の表現を否定し去つてしまつたかという点、決してそうではないようである。例えば、晩年にかかる「小園」(昭24・4)、「白き山」(同・8)、「つきかけ」(同29・2)などにも、方法・境地やその他で、牧水と相通うものがないはないと思う。両者のかかわりはこのようなかたちで、茂吉にいのちのある間保たれたのであつた。

(注)

- 1 『斎藤茂吉全集』第二十一卷二〇〇p。
- 2 『日本の詩歌』6人赤彦・千樫・憲吉・文明・麓V所収「詩人の肖像——アララギの五つの顔——」
- 3・4 『斎藤茂吉伝』(昭54・6・29新潮社刊)二九三p。
- 5・6 『同』二九三〜二九四p。
- 7・8 『同』二九三p。
- 9・10 『創作』明44・3「二月の歌」の欄の「あららぎ」の項。
- 11 『斎藤茂吉全集』第三十三卷一六一p。

12 『斎藤茂吉伝』二七八頁。

13 「九月の歌壇」の欄での「詩歌」の歌への評言「アララギ」。

14 「短歌研究」の欄での評言(同)。

15 「十月の歌壇」の欄での「詩歌」の歌への評言(同)。

16 「『死か芸術か』雑感」(大2・1)のなかで、「牧水氏の作物にも矢張り遊戯的分子があると思ふ。」と述べている。

17 注15に同じ。

18 『斎藤茂吉伝』三〇二頁。

19 「同」三〇三頁。

20 第二回以降は、明治四十四年七・十月、同四十五年六・七・

八・九月と、七回にわたって発表された。

21 『斎藤茂吉伝』二九九頁。

22 「同」二九八頁。

23 『斎藤茂吉全集』第二十一卷二〇〇～二〇一頁。

24 少し補説しておこう。牧水から、『赤光』評を書いたという

葉書を受けとり、茂吉は期待していた。そこへ、尾山篤二郎か

ら、その歌集『さすらひ』の評を「創作」に書くように言われ、

早速に書いて、「創作」の都合を牧水に聞くと、ぜひ送れと返

事があって、送った。この方は大正三年一月号に載ったが、牧

水からは、「今度の『さすらひ』評も見やうによつては折からの

『さすらひ』をだしにして私に対するあてこすりを書かれた

ものだととられる。」とされたのである。「僕は君の言を心か

ら傾聴しなかったのだ。」と、茂吉の言「『赤光』に就いて」

「創作」大3・1」と、『赤光に就いて』を讀んで若山牧水に

答ふ」(「アララギ」同・2)による)。なお、「さすらひ」を讀みて」では、篤二郎の歌が牧水と一番流通している、という意味の発言のほかは、格別のものはないように思えるのだが。

(付記)

1 牧水を取りあげた動機の一つに、昭和五十四年度短大二年

の「国語国文ゼミナール」で学生とともに牧水の歌を勉強し、

その全集にも目を通したということがある。

2 若干の用意はあったが、本稿では、茂吉の実作に触れるこ

とをしないままで終った。さらに考察を深め、それらに存分

に触れる機会を持つと思うている。

(相模女子大学教授)